

Supriyāvadāna と Bālāhāśvarāja (雲馬王) 譚

山口 周子

I はじめに

1 Divyāvadāna

Supriyāvadāna (abbr. SA) は, Divyāvadāna (abbr. Divy) と称される仏教説話テキストに, 第八話として収められているものである [Cowell & Neil 1886: 91–123, Vaidya 1959: 50–76]。そこでまず, Divy について若干の説明を加えておきたい。

現在のところ, この説話集編纂の下限は十世紀前後と見られている [平岡 2002: 136–139]。また, 校訂テキストでは全三十八話となっているが [Cowell & Neil 1886, Vaidya 1959], 最終話の Maitrakanyakāvadāna が, 本来 Haribhaṭṭa の Jātakamālā に属するものと断定されたため, 実質的には三十七話から成ると見做されている [Hahn 1977: 7]¹⁾。

このテキストの編纂目的は未だに明らかにされておらず, 極めて恣意的に選択された説話によって構成されていると云わざるを得ない [cf. Winternitz 1933: 285, 干潟 1954: 123, 平岡 2002: 43]。また, 使用されている言語や文体に関しても, 統一を欠いているとの指摘が見られる [Winternitz 1933: 285]。

ただし各説話の成立については, 三十七話のうち二十二話²⁾が, 説一切有部³⁾の律文献である『根本説一切有部律』(Mūlasarvāstivādinaya, abbr. MSV) に帰属することが確認されている [Huber 1906, Lévi 1907, 平岡 2002]。また, それ以外の十四話⁴⁾に関しても, 漢語やチベット語テキストの中に翻訳, あるいは関連文献の存在が報告されており, 少なくとも成立の上限年代をある程度推察することはできる。しかしながらこれらの中で, 第八話である SA のみ, 対応する MSV 中の説話, あるいは翻訳文献等が見出されていない。

なお平岡 2002 は定型句などの観点から, SA を MSV に起源を持たないが, 「有部内部で

1) ただし, Divy にはいくつかの系統の写本が有り, 校訂本がそれら全ての説話を収録しているわけではない [岩本 1978: 135–149]。この点については, 今後さらに研究がなされるべきであろう。

2) 第 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 12, 13, 17, 19, 21, 23, 24, 25, 30, 31, 35, 36, 37 話

3) 本稿は, 榎本 1998 の見解に従い, 説一切有部 (Sarvāstivādin) と根本説一切有部 (Mūlasarvāstivādin) は同一の部派であるとの立場をとるものとする。

4) 第 11, 14, 15, 16, 18, 20, 22, 26, 27, 28, 29, 32, 33, 34 話

創作された可能性の高いもの」[平岡 2002: 222] としている。この点も含めて SA と説一切有部との関係については、後に考察を示す。

2 本稿の目的

前述のように、SA については、その源泉と見られるテキストや翻訳文献は見つかっていないが、関連するテキストが皆無というわけではない。

まず、干瀉 1954 は参考すべきものとして、Valāhassajātaka (雲馬本生譚) (Jātaka No. 196) を挙げる [干瀉 1954: 49]。これは羅刹女の住む洲に漂着した商人を救い出す馬の王の説話 (以下「雲馬王譚」とする⁵⁾) であり、出世間部 (Lokottaravādin) のテキストである Mahāvastu⁶⁾ にも見出すことが出来る [平岡 2002: 421]。ただし、Jātaka (abbr. Ja) は上座部 (Theravāda) に、Mahāvastu (abbr. Mv) は出世間部に伝わるテキストであるため、SA との直接的な関係は考え難いように思われる。

また、Handurukande 1988 は Supriyasārthavāhajātaka の校訂テキストの前書きで、その源泉として、SA、及び Kṣemendra による Avadānakalpalatā の第六話: Badaradvīpayātrāvādāna, Haribhaṭṭa による Jātakamālā の第二話: Badaradvīpajātaka の三者を

5) 松村 1994 においては、Divy 第 36 話の記述に従い、当該説話は Rākṣasisūtra と称されている。しかしながら、現時点においてこの名称の使用が確認されているのは Divy 第 36 話のみと思われる。Cf. Divy 第 36 話; *vistareṇa rākṣasisūtram sarvaṃ vācyam* [Vaidya 1959: 452. 26] (詳しく、Rākṣasisūtra が全て述べられるべし。)

なお、この説話は『増壹阿含經』(T. 125) では「馬王品」、『佛本行集經』(T. 190) においては「五百比丘因緣品」と称されている。また、『根本有部一切説毘奈耶藥事』(T. 1448) 卷第十五では、以下のように述べられている: 佛言。復次大王。我求無上菩提故。利益攝受一切有情。大王諦聽。於中阿笈摩僧祇得分藥叉經中廣説。我於爾時。作一馬王。名婆羅訶。而為利益。化諸有情 [大正藏: XXIV, 69 b 6-9] (仏陀が仰るには、「また次に大王よ、私はこの上なき菩提を求めが故に、全ての有情を利益し、救ったのだ。大王よ、よくお聞きなさい。『中阿笈摩僧祇得分藥叉經』において詳しく説かれていることだが、私はその時、婆羅訶と名づく一匹の馬王となり、そうして利益を為し、諸々の有情を教化したのだ。)

ちなみに、西本 1933 は、「中阿含經第三十四卷商人求財經第二十に相当するものであるが、『中阿笈摩僧祇得分藥叉經』自体が何を指しているのかは明確ではない」と註している [西本 1933: XXIII, 248]。以上のように、この説話は必ずしも統一された呼称をもつものではないと思われる。そこで本稿では Jātaka No. 196 の表題を参考に、「雲馬王譚」と称する。

6) 部派仏教の一つである大衆部 (Mahāsaṃghika) から派生した説出世間部 (Lokottaravādin) の律蔵に基づくテキストとされている [Senart (ed.) 1882: 2. 13-14]。

このテキストの主たる内容は仏陀の生涯の物語だが、ジャータカやアヴァダーナ、教理的な經典といったものも含んでいる。説話はまず散文で、次いで同じ内容が韻文で語られるという形式を取るものが多く見られる。言語は全編に渡って混淆サンスクリット ('mixed Sanskrit') が使われているが、言語的に統一されたものではない。しかしながら、パーリ聖典にも見られる古い伝統や異本も含んでいるため、テキストとしては重要なものであると云う [cf. Winternitz 1933: 241-242]。

挙げている [Handurukande 1988: 27]⁷⁾。つまり、SA の並行テキストとして Supriyasārthavāhajātaka, Badaradvīpayātrāvadāna, Badaradvīpajātaka⁸⁾ の存在が示されたことになるが、Supriyasārthavāhajātaka は十一世紀以降に [Speyer 1970 (1909, 1st published): XIII–XIV], Badaradvīpayātrāvadāna は十一世紀に成立した [Das: 1888: iii–ix, Vaidya 1959 (1989, 2nd ed. by Tripathi): ix–xviii] とされているため、両者を SA の源泉と見做すのは困難であろう。一方、Badaradvīpajātaka に関しては、その上限が五世紀前半まで引き上げられている [Hahn 1981: 107–120]⁹⁾。これが SA の源泉となる可能性も全く否定できないわけではないが、記述内容から考えると、その可能性は極めて低いように思われる。その根拠については後に言及する。

さらに Handurukande 1988 は、『賢愚経』(T. 202) 第八卷四十「大施杼海(大施海を杼む)」が、Supriyasārthavāhajātaka 等の一連のスプリヤ隊商長の物語と「細かな事柄においていくらかの類似がある」と述べているが [Handurukande 1988: 27–28]¹⁰⁾、筆者の見限る限り、詳細な点においてはむしろ差異が見受けられる。しかし、本稿ではこの点に深く立ち入ることは避け、「付記」として本稿末に若干の考察を加えるに留める。

先にも触れたが、平岡 2002 は SA が MSV と共通する定型句を二十一有していること、また漢文テキストでは「無常法頌」と称されている偈頌¹¹⁾ [佐々木 1971] が、臨終の場面と

7) なお平岡 2002 は SA の参考テキストとして Ja No. 196, Badaradvīpayātrāvadāna, Supriyasārthavāhajātaka の三者を挙げている [平岡 2002: 49–50]。

8) テキストの形態としては、先の二者はすべて韻文で、Badaradvīpajātaka は Campū と称される、散文と韻文が交互に記される形式を取っている。

9) 従来、Haribhaṭṭa の Jātakamālā は、そのチベット語訳が成立した十二世紀が上限とされていた。Hahn 1981 がそれを五世紀前半とした主な論拠として、以下の二つが挙げられている。① 445 年に漢語訳された『賢愚経』(T. 202) に、この Jātakamālā に基づいて作られたと見做し得る説話がある。② 年代順に並べられている西藏タンジュールのジャータカの部には、Āryaśūra (3–4 世紀?) と Candragomin (A. D. 425–475) の著作の間に Haribhaṭṭa の Jātakamālā が位置づけられている。

10) なお、Handurukande 1988 はこの説話を 'No. 39 of the *Hsien-yü-ching*' としているが、この番号は「丹本」の番号として挙げられているものを指していると思われる。

11) 説無常法頌曰
積聚皆鎖散 崇高必墮落
會合皆別離 有命咸歸死
時阿私陀仙。説此頌已便即命終。...

無常法頌を説いて云うには
積み重なったものはみな消散し、高く聳えるものは
必ず崩れ落ちる。
出会ったものは皆離れ離れになり、命あるものは
みな死に帰す。
その時アシタ仙人は、この偈頌を説き終わってすぐに
亡くなった。

(根本説一切有部毘奈耶破僧事卷三 [大正藏: XXIV, 110 a 26–29])

SA : sarve kṣayāntā nicayāḥ patanāntāḥ samucchrayāḥ /
saṃyogā viprayogāntā maraṇāntaṃ ca jīvitam //4//
iti sa kāladharmaṇa saṃyuktaḥ. kālagate priyasene sārthavāhe...

[Vaidya 1959: 63. 16–18]



関連して記述されていることから、その帰属を説一切有部に求めること自体には問題がないとしている [平岡 2002: 212, 444–445]¹²⁾。しかし、当該偈頌は出世間部のテキストである Mv においても見られる [佐々木 1971]¹³⁾。さらに徳永 2002 によれば、この偈頌は死者を弔う水供養 (udakakriyā/udakakarman) の後、遺族に説かれる「悲歌 (śokāpanodana)」として『カーティヤーヤナ法典』に挙げられ、またパーリ仏典や Mahābhārata, Rāmāyaṇa といった叙事詩などにも見られる。

つまり死に直面した際に「無常法頌」を説くという例は、特に説一切有部のテキストに限るものではなく、また仏教に限られたものでもない。従って、当該偈頌の存在とその用例の類似という点を以って SA と MSV の関連性を指摘するのは、論拠として若干不十分である印象が拭えない。つまり、現段階において両者の関連性を明確に示唆し得るのは「共通する二十一の定型句」のみであり、それ以上に有力な要素は未だ見出されていない。

本稿は以上の点を踏まえ、SA が MSV と何等かの関わりを持つテキストであるという前提を視野に入れつつ、その関連性について具体的な形での検証を試みる。手懸りとして、干潟 1954 によって指摘された Valāhassajātaka (「雲馬本生譚」) に代表される一連の雲馬王の説話に着目し、その記述との比較分析という形で考察を進めるものとする。

II SA と雲馬王譚

1 関連テキストとの比較

Valāhassajātaka (「雲馬本生譚」) (Ja No. 196) は、仏陀の本生譚の一つであり、仏陀が Valāha と称される血統の馬として生まれた時¹⁴⁾、羅刹女の洲に漂着した商人達を救い出し

↓ (全ての蓄積は消滅にて終わり、隆盛は没落にて終わる。

出会いは別離にて終わり、生まれたものは死で終わる。// 4

と [云われるように]、彼は死の定めと結びついた。プリアセーナ隊長が亡くなると...)

12) ただし、偈頌については注釈の中でのみ言及されている。

13) 以下に参考として Mv における該当箇所を挙げる。

*sarve kṣayāntā nicayāḥ patanāntāḥ samucchrayāḥ /
saṃyogā viprayogāntā maraṇāntaṃ hi jivitaṃ //*

*te dāni dārakā āyukṣayāc ca karmakṣayāc ca kālagatā samāgatā tatraiva vārāṇasīyaṃ
nagare...*

[Senart (ed.) 1977 (original edition 1897): 183. 13–16]

(全ての蓄積は消滅にて終わり、隆盛は没落にて終わる。

出会いは別離にて終わり、生まれたものは死で終わる。

さてその少年等は寿命尽き、また業が尽きたので、死んでしまい、まさにそのヴァーラーナシーの街にて [再び生まれ変わって] 出会 [うことにな] った。)

14) *tasmim̐ pana kāle bodhisatto valāhassayoniyaṃ nibbatti, sabbaseto kākasiso muñjakeso iddhimā vehāsaṃgamo ahoṣi.* [Fausbøll (ed.) 1990 (1879, 1st published): 129. 8–10] (また ↗

たという話である。一方 SA では、Badaradvīpa¹⁵⁾ からヴァーラーナシーの街に、隊長スプリヤを連れ帰る馬として Bālāhāsvarāja が登場する。この点が類似する要素と見做されてきたと思われるのだが、テキストの相互関係について、特に具体的な考察が示されたとは云い難い。この事は Mv との関係についても同様と云える。

ところで筆者の見る限り、これら異なるテキストに伝わる雲馬王譚には、複数の共通する記述表現が存在する。つまり、直接的な相互影響は考え難くとも、特定の記述表現とともに、部派を超えて伝播した説話である可能性が考えられる。そこで、Ja および Mv 以外にも雲馬王譚を持つテキストを考察対象に加え、それらの記述表現について比較検討してみたい。本稿において扱うテキストは、干潟 1956 及び平岡 2002 に指摘された両テキストに、『中阿含經』を始めとする以下の四者を加えたもの、及び SA とする。

No. 1 : Jātaka¹⁶⁾ No. 196 (abbr. J 196) テキストは Fausbøll (ed.) 1990 : 127 – 130
を使用する。

No. 2 : Mahāvastu 中の *sāriputramaudgalyāyanapramukhānām pañcānām bhikṣu-
satānām rākṣasīdvīpaksīptānām jāta* (abbr. ŚJ) テキストは [Senart
(ed.) 1882 : 67 – 90] を使用する。

No. 3 : 『中阿含經』¹⁷⁾ (T. 26) 卷第三十四「商人求財經第二十」 テキストは、大

↙ その時、菩薩は Valāha の胎に生まれた。全身が白く、烏の [ように黒い] 頭をして、ムンジャ草の [ような] 鬣で、神通力を持ち、空を飛ぶのだった)

15) この洲は、あらゆる望みを叶える如意宝珠のある、一種の理想郷のような街として描かれている。

mā tvaṃ sārthavāha khedam āpadyasva. rddhiṣyati te praṇidhir iti. asti khalu mahāsārt-havāha asminneva jambudvīpe badaradvīpo nāma mahāpattano 'manuṣyāvacarito mahesā-khyamanuṣyādhiṣṭhitah. santi tasmīn badaradvīpe pradhānāni ratnāni sarvasattvavicitramanorathaparipūrakāṇi... [Vaidya 1959 : 64. 15 – 17] ([女神は]「隊長長よ、汝は気落ちしてはならない。汝の誓願は成し遂げられよう。」と [云った。続けて、]「よいか、大隊商長よ、まさにこの閻浮洲の中に、バダラ洲という名の [並みの] 人には暮らされぬ、際立った人によって管理されている大都市がある。そのバダラ洲には全ての生き物の様々な望みを満たす、最高の宝石がある...」)

16) Jātakāthavaṇṇanā. 上座部 (Theravāda) に所属するテキストである [cf. Ryhs Davids 1903, Fausbøll (ed.) 1990 (1st ed. 1877) : 1]。制作年代はおそらく五世紀ごろといわれる。Ganthavaṃsa (ビルマで著されたパーリ語の文献史書。制作年代不明) は、その編纂者を Buddaghosa (五世紀) であるとしているが [Minaeff (ed.) 1886]、これは確実なものではないという見解が見られる [Ryhs Davids 1903 : 189 – 209, Geiger 1916 : 19 – 22, 森祖道 1984 : 93, 451, 473]。

17) 現存のものは、「罽賓」出身の瞿曇僧伽提婆 (Gotama Saṃghadeva) によって、397 – 398 年に訳出されたものと云われる。なお、榎本 1984, 1988 は「罽賓」の示す地域は「カシュミールからアフガニスタンに及ぶ北・北西インドのどこか」という。原本はガンダーラ語で書かれてあったと見られ、さらに教理内容も考え合わせると、『中阿含』の原本はカシュミールの説一切有部において伝えられていたと推察している。

正藏：I, 642 a 29 – 645 b 8 を使用する。

No. 4 : 'Dul ba gshi¹⁸⁾ 第四十七章の一部 (abbr. gShi) テキストは、北京版 [P 1030, Ge 220 a 6 – 224 b 2] を用い、デルゲ版 [D1, Kha 234 b 4 – 239 b 4] は綴り等の差異が確認された場合、脚注に挙げる。

No. 5 : 『根本説一切有部毘奈耶』¹⁹⁾ (T. 1442) 第四十七, 四十八巻の一部 テキストは、大正藏：XXIII, 887 a 27 – 889 c 21 を使用する。なお、このテキストは No. 1 (J 196) や次に示す No. 6 などと共に、Divy 第三十六話：Mākandikāvādāna [Cowell & Neil 1886: 515 – 544, Vaidya 1959: 446 – 464] に関連する説話とされてきたものである [cf. Huber 1906: 3–4, Lévi 1907: 109, 干潟 1956: 52, 平岡 2002: 73]²⁰⁾

No. 6 : 'Dul ba rnam par 'byed pa²¹⁾ 第七十六, 七十七章の一部 (abbr. rNam)

18) Vinayavastu に相当する。訳出年代は八世紀末から九世紀始めにかけてであり、翻訳者は Sarvajñādeva, Vidyākaraprabha, Dharmākara, dPal gyi lhun po [Panglung 1981: XVIII]。コロフォンは以下のとおりである。

kha che'i mkhan po Sarba dzñā de ba dang/rgya gar gyi mkhan po Bidyā ka ra pra bha dang/kha che'i mkhan po Dharma ka ra dang/lo tstsha ba ban de dPal gyi (text. gyis) lhun pos bsgyur cing/rgya gar mkhan po Bidyā ka ra pra bha dang/zhu chen gyi lo tstsha ban dhe dPal prtsegs kyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o// [P 1030, Ce 277 a 2–3]

(カシミールの和尚 Sarvajñādeva, インドの和尚 Vidyākaraprabha, カシミールの和尚 Dharmākara, 翻訳僧 dPal gyi lhun po が訳して、インドの和尚 Vidyākaraprabha と大校閲翻訳僧 dPal prtsegs が訳し、校訂し、[テキストとして] 確定した。)

19) 説一切有部の律文献であり、MSV の漢語訳テキスト。義浄によって 700 年から 712 年間に訳された [Panglung 1981: XVII]。原本となる梵本は、おそらく義浄がよく滞在したというナーランダ寺のものと推察されるという [西本 1933: XIX, 3–5]。

20) ただし、Divy 第 36 話における雲馬王に関する記述は極めて簡略化されており、以下に示す箇所のみに見受けられるため、本稿では特に取り扱わないものとする。

so 'nupūrveṇa grāmanagaranīgamarāṣṭrarājadhāniṣu cañcūryamāṇaḥ pattanāny avalokayan samudratīram anuprāptaḥ. vistareṇa rākṣasīsūtraṃ sarvaṃ vācyam. sarve te vaṇiḥo bālā-hāśvarājāt patitāḥ, tābhīś ca rākṣasībhir bhakṣitāḥ. śiṃhalaka ekaḥ svastikṣemābhyāṃ jambudvīpam anuprāptaḥ. [Vaidya 1956: 452. 25–27] (彼は順々に村、街、都市、王国、王都を歩き回りながら、町々を見つつ、海岸に着いた。詳しく、羅刹女経がすべて述べられるべきである (詳細はすべて『羅刹女経』にある)。全てのその商人たちが雲馬王から落ちた。そして [彼らは] その羅刹女たちによって食べられた。シンハラただ一人だけが無事に閻浮洲にたどり着いた。)

21) Vinayavibhaṅga に相当する。訳出年代は No. 4 (gShi) に同じ。翻訳者は Jinamitra, Klu'i rgyal mtshan [Panglung 1981: XVII]。コロフォンは以下のとおりである。

'phags pa gzhi thams cad yod par smra ba'i 'dul ba 'dzin pa kha che'i bye brag tu smra ba'i slob dpon Dzi na mi tra (text. 'Dzin na mi tra) dang/zhu chen gyi lo tstsha ba ban de Klu'i rgyal mtshan gyis bsgrub cing zhus te gtan la phab/'di la shu lo ka ni nyi khri lga stong yod/bam po ni brgyad bcu gsum byas so// [P 1032, Te 254 a 4–3]

(聖根本有部一切説部の律師であり、カシミールの毘婆沙師 Jinamitra ('Dzi na mi tra' [D3, Nya へ

No. 4 (gShi) と同じく、テキスト是北京版 [P 1032, Te 162 b 2 – 171 a 7] を使用し、参考資料としてデルゲ版 [D3, Nya 174 b 1 – 183 b 7] を挙げる。

No. 7 : Supriyāvādāna (abbr. SA) テキストは Vaidya 1959: 58 – 76 を使用し、Cowell & Neil 1886: 91 – 123 に綴り等の差異が認められた場合は、脚注に示す。

上記のテキスト以外にも、雲馬王譚は『増耆阿含經』、『佛本行集經』において散文の形で、Lalitavistara, Rāṣṭrapālapariṣcchā において偈頌の形で伝えられている。また、Avalokiteśvaragūṇakāraṇḍavyūha には散文と韻文の二種があるが、その双方において見られる [岩本 1978: 143 – 149] ことなどから、当該説話は部派仏教のみならず、大乘仏教まで広く伝播していることが窺える。ただし、本稿においては煩雑さを避けるため、従来 SA との関連を指摘されてきた J 196, ŚJ 及び『中阿含經』等の説一切有部に属するテキストとの関係に論点を絞るものとする²²⁾。

↙ 269 a 5]) と大校閲翻訳僧 Klu'i rgyal mtshan が訳して校訂し、[テキストとして] 確定した [ものであり]、ここに偈頌が二万五千あり、章は八十三作られた。)

22) 本稿で使用しなかった雲馬本生譚を含むテキストを以下に示す。ただし紙面の都合上、具体的な記述の提示は割愛し、校訂テキスト等における記述箇所のみを挙げる。

• 偈頌に残されているもの

Lalitavistara: [Lefmann (ed.) 1977 (first ed., 1902): 169. 1–4, Vaidya (ed.) 1987: 132. 11–14, 外園 (ed.) 1994: 620. 13–16]

(Tib) 'phags pa rgya cher rol pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo [P 763, Ku 100 a 4–5 ; D 95, Kha 106 a 4–5]

(漢) 『大方大莊嚴經』(T. 187) [大正藏: III, 566 c 5–6]

Rāṣṭrapālapariṣcchā: [Vaidya 1961: 136. 13–14]

(Tib) 'Phags pa yul 'khor skyong gis zhus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo [P 760, Zhi 205 b 5 ; D 62, Nga 239 a 6–7]

(漢) 『大寶積經』(T. 310) [大正藏: XI, 462 c 12–13]

『佛說護國尊者諸問經』(T. 321) [大正藏: XII, 6 b 9–10]

Avalokiteśvaragūṇakāraṇḍavyūha (第 16 章 'Siṃhalasārthavāhoddhāraṇa'): [岩本 1978: 236–324] (なお、このテキストでは、雲馬王は觀世音菩薩の化身とされている。)

• 散文で残されているもの

Avalokiteśvaragūṇakāraṇḍavyūha ('Aśvarājavarṇa'): [Vaidya 1961: 284–288, Mette 1997: 49–62]

(Tib) 'Phags pa za ma tog bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo [P 784, Chu 247 a 3–251 a 8 ; D 116, Ja 221 b 3–225 b 2]

(漢) 『大莊嚴寶王經』(T. 1050) [大正藏: XX, 56 a 28–57 c 2]

「馬王品」: 『増耆阿含經』(T. 125) [大正藏: II, 769 b 9–770 c 12]

「五百比丘因縁品」: 『佛本行集經』(T. 190) [大正藏: III, 879 a 3–882 b 14]

「精進度無極章」の一部: 『六度集經』(T. 152) [大正藏: III, 33 b 24–33 c 14]

なお、『大唐西域記』(卷第十一 一・三)にも仏教所伝のセイロン島建国伝説として、この説話が記録されている [水谷 1999: 282–288]。

これは『今昔物語集』にも見られるため [干潟 1956: 99, 今野達 (校注): 1999, 388–398], 少

また、チベット語テキストである No. 4 (gShi) 及び No. 6 (rNam) は、そのサンスクリット語原本が未発見であるため [cf. Panlung 1981: 41–42, 156], 解釈にあたってはモンゴル語訳テキスト²³⁾も参考資料とした。

上記の七つのテキストには全て、旅の商人の辿り着いた先 (No. 1 (J 196) –No. 6 (rNam) : 羅刹女のいる洲; No. 7 (SA) : バダラ洲) にやって来た雲馬王が、彼等をその故郷に連れ帰るというモチーフが見られる。本稿では、その中でも特に雲馬王の描写に焦点をあて、SA に見られる以下の五要素を中心に見てゆく。なおテキスト引用末の [] 内は校訂テキストの頁あるいはフォリオ番号、及び行数を示す。

No. 7 (SA) :

... *tatra drakṣyasi samaṃ bhūmipradeśam akṛṣṭoptaṃ ca taṇḍulaphalaśālim akaṇakam atuṣaṃ śucim nisphuṭigandhikaṃ caturāṅgulaṃ paryavanaddham. yas tam aṣṭamyām pañcadaśyām vā bālāho 'svarājāḥ paribhuja sukhi arogo balavān prīnitendriyaḥ pūrvakāyam abhyunnamayyodānam²⁴⁾ udānayatī — kaḥ pāragāmi, kaḥ pāragāmi, kaḥ pāraṃ nayāmi, svastikṣemābhyaṃ jambudvīpaṃ anuprāpāyāmi.* [74. 23–27] (ここで貴方は、平らな大地と、①耕されず蒔かれず [して生えた] 糠や穀殻なく、清浄で香しい精製した米のある、四アングラ [の長さ] に生え揃った稲を見るでしょう。八日あるいは ②十五日の日に、それを食べて、③幸福で悪いなく力に満ち、感官は満ち足りて、前半身を持ち上げつつ、④雲馬王は厳かな声をあげるのです²⁵⁾ — ⑤誰か向こう岸へ行く者はいるか、誰か向こう岸へ行く者はいるか。誰を向こう岸につれて行こうか、無事平穩に閻浮洲へ渡してやろうか。)

No. 1 (J 196) :

tasmim̐ pana kāle bodhisatto valāhassa yoniyam̐ nibbatti, sabbaseto kākasiso muñjakeso iddhiṃ vā vehāsaṃgamo ahoṣi. so himavantato ākāse uppatitvā tambapaṇṇidīpaṃ gantvā tattha tambapaṇṇisare pallale sayam̐jātasālīm̐ khādītva gacchati, evaṃ gacchanto va "janaṇadaṃ gantukāmā atthi, janaṇadaṃ gantukāmā atthi" tikkhattuṃ karuṇāya paribhāvitaṃ mānusiṃvācaṃ bhāsati. [129. 8–14] (またその時、菩薩は ④ヴァラーハの胎に生まれた。全身が白く、鳥の [ように黒い] 頭をして、ムンジャ草の [ような] 鬘で、神通力を持ち、天空を往くのだった。彼はヒマラヤ山から天空に飛びあがってセイロンに行き、セイロン池の沼地で ①自生の稲を食

なくとも十二世紀には日本でも説話として受容されていたと思われる。ただし、ここでは馬王は観世音菩薩の化身とされており、『妙法蓮華經』(T. 262)との関わりも指摘されている。また、『宇治集遺物語』(1221年以降に成立)にもこの説話が収められている [三木 (校注) 1990: 168–174, 549–551]。その他、「同話・類話」が、『法苑珠林』『経律異相』『宇津保物語』等にも見られる [三木 (校注) 1990: 525–562]。

23) No. 4 (gShi): Nomuṛadqaqui-yin sitügen (abbr. Ns), 第47章の一部 [Chandra (ed.) 1979: XCV, Ge 34 a 31–41 a 17]。

No. 6 (rNam): Vinai-yin teyin böged ilaṛaṛci (abbr. Vt), 第76, 77章の一部 [Chandra (ed.) 1979: CI, Te 238 b 27–253 b 11]。

24) var. *atyunnamayyodānam* [Cowell & Neil 1886: 120. 5]

25) 直訳すれば「ウダーナ (感嘆の詞) を挙げている」となるが、ここではPTSの記述を参考に訳した: *idaṃ udānaṃ udānesi* i. e. breathes forth this solemn utterance. [cf. PTS, p. 134]

べて [歩いて] 行った。またそうやって行きながら、⑤「人の国に行きたい者は居るか、人の国に行きたい者は居るか」と三度、慈悲による流暢な人語を云った。）

ここでは①、④、⑤の要素が SA と一致する点として挙げられる。ただし、使われている記述が若干異なる点は否めない。

なお雲馬の形状に関しては、Majjhimanikāya および Dīghanikāya 中に、ほぼ同一の記述が見られた。そこにおける雲馬王は、いずれも転輪王 (Cakravartin) の七宝²⁶⁾の一つとして言及されている²⁷⁾。

No. 2 (ŚJ) :

kārttikapūrṇamāsyāṃ keśi nāmāśvarājā uttarakurudvīpāto akṛṣṭoptaṃ śālīm akaṇaṃ atuṣaṃ surabhitaṇḍulaphalaṃ paribhuñjītvā imaṃ rākṣasīdvīpaṃ āgacchati. so ihāgatvā trīṇi vārāṃ mānuṣikāya vācāya śabdaṃ karoti. ko iha mahāsamudrasya pāraṃ gantum icchati ahaṃ svastinā uttarayiṣyāmi. [72. 18–21] (カールツェツィカ月の ②満月の日に、ケーシンと言う名の馬の王が、北俱盧洲から ①耕されず蒔かれず [して生えた]、糠や稗なき、香しい精製した米ある稲を堪能してから、この羅刹女の洲にやって来ます。彼はここにやってきて、三度、人の言葉で声をあげるのです。⑤「さて、大海の向こう岸に行きたい者は誰か。私が無事に渡らせよう。」)

まず①が SA とほぼ同じ記述で記されていることが確認できよう。②は、「満月の日」が十五日を指すものと見做せば、共通要素として数えることができる。また⑤も No. 1 (J 196) 同様、SA とは表現差が認められるものの、概ね同類の要素と見做しえる。

馬王の名については、上記の散文部分では 'keśin-' (鬣もてる者) とされているが、散文箇所が続く偈文では、'valāha-' と称されている²⁸⁾。

26) 以下参考までに Majjhimanikāya の記述を挙げる。

rājā cakkavattī sattahī ratanehi samannāgato catuhi ca iddhini, ... [Chalmers (ed.) 1960: 172. 10–11] (転輪王は七つの宝と四つの神通に伴われる。...)

続いて以下の七宝が挙げられている。1) *cakkaratana-* (輪宝) [172. 15], 2) *hattiratana-* (象宝) [173. 29], 3) *assaratana-* (馬宝) [174. 8], 4) *maṇiratana-* (珠寶) [174. 20], 5) *itthiratana-* (女宝) [174. 31], 6) *gahapatiratana-* (家主宝) [175. 14–15], 7) *pariṇāyakarata-* (臣宝) [175. 33]。

27) *puna ca paraṃ, bhikkhave, rañño cakkavattissa assaratanam pātubhavati, sabbaseto (text. sabbaseso) kākasiso muñjakeso iddhimā vehāsaṅgamo Valāho nāma assarājā.* [Chalmers (ed.) 1960: 174. 8–10] (そしてまた比丘たちよ、転輪王には馬宝が出現する。全身が白く、鴉の [ような黒い] 頭をして、ムンジャ草の [如き] 鬣をもち、神通力を有して天空を往く、ヴェラーハという名の馬の王である。)

puna ca paraṃ ānanda rañño Mahā-sudassanassa assa-ratanam patur ahoṣi, sabba-seto kāka-siso muñjakeso iddhimā vehāsaṃ-gamo Valāhako nāma assa-rājā. [Rhys Davids, Carpenter (ed.) 1966: 174. 25–27] (そしてまた、阿難よ。大善見王には馬宝が出現した。全身が白く、鴉の [ような黒い] 頭をして、ムンジャ草の [如き] 鬣をもち、神通力を有して天空を往く、ヴェラーハカという名の馬の王である。)

28) *kārttike māse kaumudīpūrṇamāsyāṃ āgamīsyati/ valāho turago śighro muñjakeṣo hayottamo//* [85. 7–8]

(カールツェツィカ月のカウムディーの満月の日に、やってくるでしょう、



No. 3 : (中阿含經)

我等聞天於空中唱曰。閻浮洲諸商人愚癡不定。亦不善解。所以者何。不能令十五日說從解脫時而南行。彼有駝馬王。食自然粳米。安隱快樂。充滿諸根。再三唱曰。誰欲度彼岸。誰欲使我脫。誰欲使我將從此安隱度至閻浮洲耶。[643 c 26-644 a 2] (私達は、神々が空中で [このように] 唱えているのを聞きました。「閻浮洲の商人たちは愚かで、定まらず、またよく理解しない。何故というに、②十五日に従解脫を説く時であっても南に行かせることが出来ないのだ。あそこには駝馬王がいて、①自然に生えた粳米を食し、③安寧にして心地よく、諸々の感官は充ちたりて、二度三度と唱えて云うのだ——誰か彼岸に渡りたい者はいるか。誰か私に逃がして欲しい者はいるか。誰か私に、ここから閻浮洲まで無事に連れて行って欲しい者はいるか。)」

馬王の名称以外は、ほぼ SA と共通する要素が見出せる。「駝馬」は「長い毛ある馬」を意味し²⁹⁾、No. 2 (ŚJ) の散文箇所に見られた馬王の名称に共通する起源をもつことも予想される。ただし本稿においては、馬王の名称が複数存在するという点を指摘しておくに留める。

No. 4 (gShi) :

... 'di na bdag cag gis³⁰⁾ bar snang la rgyu ba'i lha rnams kye ma 'dzam bu'i gling gi don 'thun³¹⁾ rnams gso sbyong bcva lnga pa de nyid la byang phyogs kyī gseb lam gang na rta'i rgyal po sprin gyi shugs can ma rmos ma btab pa'i 'bras sa lu³²⁾ za ba bde ba dang/nad med pa dang/stobs dang ldan pas dbang po rnams tshim pa/mgo 'phang bstod de³³⁾ pha rol du 'gro ba ni su yod/su ni pha rol du bkri/su ni 'dzam bu'i gling du legs pa dang/bde bar phyin par bya zhes ched du brjod pa ched³⁴⁾ brjod pa yod par mi 'gro ba ni byis pa'o zhes sgra 'byin pa thos kyis/... [P 222 a 5-7] (ここで、私どもは上空を徘徊する神々が、「おい、閻浮洲の商人らよ、まさにかの②十五日の布薩日に、北方の隘路のところで④雲の力もてる馬王が、①耕作されず蒔かれず [して生えた] 自生の稲を食べる [者として]、③幸福で病無く、力に満ちていることによって諸感官が満足し、頭を持ち上げて、——⑤対岸に行くのは誰か。誰を対岸に連れて行こうか。誰を閻浮洲に無事平穩に辿り着くようにしようか——と、厳かな声を挙げている³⁵⁾というのに、行かないとは愚か者だ」と声を挙げているのを聴きましたので...)

このテキストでは①-⑤の全ての要素が見出せると思われる。特に、SA では二度繰り返されている 'kaḥ pārāgāmi (誰が対岸に行きたいのか)' に相当するものが一度だけになっているが、⑤はよく類似する。なお、④については Balāha- のチベット語訳と認められて

④ ヴァラーハなる馬、俊足でムンジャ草の [ような] 鬣ある、最も優れた馬が。)

29) 立花 1930: 665 の脚注八に、「駝馬。長き毛ある馬の義。雲馬 (Valāhassa) の事なるべし。」とある。

30) 'gi' [D 237 a 1]. Ns も属格で訳している。'ba būrin-ū (私どもの)' [37 b 24]

31) 'mthun' [D 237 a 1]

32) 'sā lu' [D 237 a 2]

33) Ns: 'toluyai-ban čongnuyiju (頭を持ち上げて)' [37 b 30-31]

34) 'ched du' [D 237 a 3]

35) ched du brjod pa ched brjod pa yod. = udānaṃ udānayatī.

いる [榊 & 西尾 (ed.) 1923 (復刻版 1998): 319]。

No. 5 : (根本説一切有部毘奈耶)

於十五日褒灑陀時。於虛空中有諸天人。作如是語。瞻部洲人汝無智慧故守愚癡。於十五日褒灑陀時。不解北行尋求出路。每十五日有天馬王。名婆羅訶。從海而出遊在岸邊。食自然香稻無病充溢有大力勢。舉首四顧如是三告。誰有欲向彼岸還瞻部洲。[888 c 16-22] (十五日の布薩日の時、空中に天人たちがいて、こんなことを云っておりました。「閻浮洲の人よ、お前は智慧がないから愚かなままで、②十五日の布薩の時に北に行つて逃げ道を求めを尋ねることを理解していない。十五日毎に天馬の王があつて、④婆羅訶 (Balāha)³⁶⁾ というのが、海から出て岸邊をうろうろしている。①自然に生えた香しい稲を食べて、③病なく満ち足りて大いに勢いがあるのが、首を擡げて周囲を見回してこういう風に三度呼ばれる。——⑤誰か対岸に向かい、閻浮洲に帰り着きたい者はいるか——」。

ここでも①-⑤の要素がすべて見出せる。ただし、⑤の表現は SA よりも簡潔になっている。また、④については SA と同一の呼称が音訳されたものであることがわかる。

No. 6 (rNam) :

bzod ldan 'di na bdag cag gis steng na lha dag rnam par rgyu ba'i sgra thos pa/kye 'dzam bu'i gling ba'i tshong pa byis pa dag 'di nyid kyi gso sbyong bcva lnga pa la byang lam du deng shig dang/de na rta'i rgyal po sprin gyi shugs can³⁷⁾ zhes bya ba ma rmos ma btab

36) 西本 1933: XXI, 280, 脚注三十一に、「婆羅訶 (Balāha)」とある。

37) No. 6 (rNam) のモンゴル語訳テキストである Vt には、サンスクリット語が音訳された形で記述されている: ... tende morin qayan *balaha* neretü öbesüben uryūsan uryamal tuturyan-u ür-e-yi idejü... [245 b 1-3] (ここで、馬の王であるバラハという名があるのが、自ら生えた植物である稲の実(米)を食べて...)。一方、No. 4 (gShi) の翻訳である Ns は、チベット語を直訳している: ... mori-un qayan *egülen kücütü* ese tariysan salu tuturyan-i idejü... [37 b 27-28] (馬の王である雲の力持てるものが、耕作されず [して生えた] 稲 [の] 米を食べて...) [cf. Ishihama & Fukuda (ed.) 1989: 233]。

モンゴル語における音訳サンスクリット語語彙には、主として古典ウイグル語經由、チベット語經由の二種が挙げられる。古典ウイグル語經由の場合、有生物語彙は語末の -a が -i となり、無生物語彙は -# になるという規則性が見出される [庄垣内 1990]。Vt に見られる *balaha* は有生物語彙であるにも拘らず、語末音が -a であるため、古典ウイグル語經由とは云い難い。

一方チベット語に、雲馬を示す語として *ba la ha* が確認された。例として Kāraṇḍavyūha の一節を挙げる: ... rim gyis rta'i rgyal po *ba la ha* ga la ba der phyin nas/rta'i rgyal po *ba la ha* sman sbed thams cad ces bya ba myangs so//... des pha rol du su 'gro pha rol du su 'gro zhes tshig lan gsum smras pa dang/... [P 250 b 6-7, D 224 b 7-225 a 2] (次第に、雲馬王のところに辿り着くと、雲馬王は全てを秘匿するという菓草 (sman sbed thams cad ces bya ba) を味わっていた。... 彼は「対岸へ誰が行くのか。対岸へ誰が行くのか」という言葉を三度言つて...)。このことから、Vt の *balaha* は、チベット語において雲馬王の音訳語彙として定着していたものを借用したものと思われる。

なお、ここに挙げたチベット語テキストとサンスクリット語テキストでは、馬王の食べている菓草の名が異なっている可能性がある。チベット語テキストでは上に記した通り、「全てを秘匿する (sbed thams cad)」となっているのに対し、サンスクリット語テキストでは以下のように記述されている: ... *yāvat paśyanti bālāham aśvarājam tām (text. tām) sarvaśvetānāmau-*

ba'i 'bras sa lu³⁸⁾ 'i 'bru zos nas bde ba dang/nad med pa dang/stobs dang ldan pa dang/dbang po tshim pas ro stod bsrang ste pha rol du su 'gro/pha rol du su 'gro/su zhiḡ pa rol du bkur bar bya/su zhiḡ bde legs dang/bde ba dag tu 'dzam bu'i gling du phyin par bya zhes lan gsum ched du brjod ba ched du rjod par byed kyis/... [P 167 b 4-6] (忍耐ある方、ここで私どもは、上 [空] に徘徊する神々の声を聴きました。「おい、愚かな閻浮洲の商人らよ。まさにこの布薩 [日である] ②十五日に、北道へ行け。するとそこに、④雲の力あるという馬王が、①耕されず蒔かれず (して生えた) 自生の稲の米を食べてから、③幸福で病無く、力あり、感官は満ち足りて上半身を持ち上げて——⑤対岸に誰が行くのか。対岸に誰が行くのか。誰を対岸へ運ぶとしようか。誰を無事平穩に閻浮洲に辿り着くようにしようか——と三度繰り返して厳かな声を挙げている。」...)

ここでも①-⑤の要素が全て含まれていることが確認できる。④はSAに見られる呼称と同一のものを訳したと見られ、さらに⑤に関しては 'kaḡ pāragāmi (誰が対岸に行きたいのか)' に相当する記述がSA同様、二度繰り返されている。これらの点を考えあわせると、先に挙げた No. 4 (gShi) よりも、SAにより近い記述をチベット語訳したものと思われる。

以上の結果を、以下のように表の形でまとめてみた。記述が存在しないものは×、SAと内容的に一致するものは△、部分的に一致する記述を含むものは○、極めて類似する記述をもつものは◎で表している。

	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6
① (自生の稲)	△	◎	△	◎	△	◎
② (十五日)	×	△	◎	◎	◎	◎
③ (馬王の様子)	×	×	○	◎	◎	◎
④ (Bālāha-)	◎	◎ (偈頌。散文は Keśin-)	× (駝馬王)	◎	◎	◎
⑤ (呼びかけ)	△	△	○	◎	○	◎

最もSAと近い関係にあるのはNo. 4 (gShi) とNo. 6 (rNam) のテキストであることが確認できる。以上の検証結果と、従来からの指摘を考え合わせると、SAは説一切有部の律文献から取り込まれた記述を有しているといえよう。さらに、SAにある雲馬王のモチーフが、そこから取り入れられたものである可能性は、極めて高い。

↙ adhim asvādayati.... [Vaidya 1961, 287. 27] (彼等が雲馬王を見たところ、[雲馬王は] かの全て白色 (sarvaśvetā) という名の菓草を食べていた。)

モンゴル語テキストでは、この箇所はサンスクリット語の意識と音訳を併用する形で記されている: morin-u qaḡan bala-ha čaḡan būkü suveta em-i emesübei [Chandra 1978: LXVI, Ja 287 a 18-19] (馬の王・バラハは、白い「全てスヴェータ (?) (sarvaśvetā)」[なる] 菓草を味わっていた。)

こういった現象の原因については未解決のままであるが、差し当たっては、記述の差異が存在することを指摘しておく。

38) 'sā lu' [D 180 a 1]

No. 6 (rNam) は、Divy 第三十六話と関連を持つものとされてきたが、SA の関連テキストである可能性も否定できない。

次に、前述した Badaradvipajātaka の中にある雲馬王についての記述をみると、以下のようになっている。テキストは Hahn 1992 を使用した。

akṛṣṭoptasya śāler atūṣaṃ phalam aśnantam uditam iva śaradvalāhakaṃ valāhakanāmānam aśvarājaṃ drakṣyasi. [35. 11–12] (耕やされ蒔かれず [して生えた] 稲の、籾殻のない実を食べつつある、湧き上がった秋の雲の如き、ヴェラーハカという名の馬の王を見るであろう。)

また、同書では雲馬王の言葉が次のように記されている。

*itaḥ purāt sāgaraśailadurgamān/
nayāmi kaṃ tvāṃ viśayaṃ vihāyasā//* [35. 26–27]

(ここより先の、海や山の難所から

空を通して、住まいとするところにお前を連れて行ってやろう。)

Badaradvipajātaka は SA の並行テキストであるにも関わらず、これらの箇所には No. 1 (J 196) – No. 6 (rNam) のような一致は見られない。Badaradvipajātaka と SA の両者に何等かの関わりがあるのはほぼ確実であろうが、使用されている記述から見れば、Badaradvipajātaka が SA の源泉テキストである可能性は低い。むしろ、SA あるいはそれに類するテキストを素材として Badaradvipajātaka が創作された可能性の方が高い。このことは、Badaradvipajātaka 成立年代である五世紀前半以前に SA が成立していた可能性を示唆するものである。無論、目下の論拠は両者の記述の比較のみであり、これを以って十分な確定条件が提示できたとは云い難いが、少なくとも SA の成立年代を示唆し得る一要素として、指摘しておきたい。

2 チベット語訳 MSV と SA について

先の考察により、雲馬王譚の中に SA と極めて近い記述をものとして、No. 4 (gShi)、No. 6 (rNam) が挙げられる。次いで、どちらがより SA に近いものかという点を考察したい。

まず注目しておきたい点は、「本生譚の連結」である。No. 4 (gShi)、No. 6 (rNam)、SA とともに、内容としては仏陀の前世の物語、即ち本生譚 (Jātaka) と称されるものとなっており、各説話の結びの部分では、必ず前世の存在と、現世の存在との関連付けがなされている [cf. Fausbøll (ed.) 1922; II–III]。以下に示すのは、そのくだりである。

SA :

bhagavān āha — kiṃ manyadhve bhikṣavo yo 'sau supriyo nāma mahāsārthavāhaḥ, aham eva tena kālena tena samayena bodhisattvacaryāyāṃ vartitavān . . . [76. 7–8] (世尊は仰った。「お前たちは」 どう思うか。このスプリヤという名の大隊商長、彼は他ならぬこの私であり、かの時、菩薩行に励んでいたのだ。...)

No. 4 (gShi) :

de'i tshe de'i dus na rta'i rgyal po sprin gyi shugs can du gyur pa de gzhan zhid yin snyam na khyod kyis de ltar mi blta ste/'on kyang nga nyid de'i tshe de'i dus na rta'i rgyal po sprin gyi shugs can zhes bya bar gyur to// [P 224 a 8-224 b 1] (あの時雲馬王となったのは、他の誰かであると思うならば、お前はそうのように考えてはいけない。そうではなく、他ならぬこの私(仏陀)があの時、雲馬王となったのだ。)

No. 6 (rNam) :

dge slong dag de'i tshe de'i dus na ded dpon sing ga la gang yin pa de ni nga nyid yin no// [P 173 b 6] (比丘たちよ、その時の隊長シンガラであった人は、他ならぬ私(仏陀)である。)

No. 4 (gShi) では雲馬王を仏陀の前世とし、No. 6 (rNam) および SA では隊長を仏陀の前世としている³⁹⁾。この点において、SA は No. 4 (gShi) よりも No. 6 (rNam) により近い要素をもつと云える。また、使われている表現も No. 6 (rNam) に類似している。

さらに、SA を含む七つのテキストの内、No. 5 (根本説一切有部)、No. 6 (rNam) 及び SA にのみ主人公の隊長が雲馬によって故郷に辿り着いた後の出来事が記されており、内容は完全には一致しないが、一つの共通点を見出すことができる。なおここでは No. 5 (根本説一切有部) よりも No. 6 (rNam) の記述を問題としているため、後者のみを示すことにする。

SA :

atrāntarāt kālagate brahmadatte kāśīrājani paurāmātyaiḥ supriyo mahāsārthavāho rājābhiṣekeṇābhiṣiktaḥ. [75. 25-26] (そのうちに、カーシ国王であるブラフマダッタが亡くなると、市民や大臣らによってスプリヤ大隊隊長が王の灌頂を受けた。)

No. 6 (rNam) :

... kha cig gis smras pa/ded dpon sing ga la las snying stobs can shes rab dang ldan pa su zhid yod kyis ded dpon sing ga la rgyal por dbang bskur bar bya'o//de ltar bya'o zhes de dag gyis ded dpon sing ga la la smras pa/ded dpon rgyal srid long shig/des smras pa/kho bo ni tshong ba'i tha snyad kyis 'tsho ba yin pas kho bo rgyal srid kyis ci bya/de dag gyis smras⁴⁰⁾/ded dpon gzhan gyis rgyal srid byed du 'jug mi nus kyis long shig/des smras pa/dam tshig gis blang bar bya ste/gal te khyed cag kho bo'i tshig bzhin byed na'o // de dag gis smras pa/byed kyis long shig/ma nyes so // de dag gyis grong khyer mdzes par byas nas ded dpon sing ga la bkur sti chen pos rgyal srid la dbang bskur to // [P 173 a 4-7]

39) なお本稿で取り上げたテキストのうち、SA のみが馬王の前世を彌勒菩薩とする [cf. 76. 14-15]。また、No. 6 (rNam) では馬王の前世についての言及はない。No. 1 (J 196) [cf. 130. 20-21], No. 2 (ŚJ) [cf. 76. 18-77. 1] では No. 4 (gShi) 同様、雲馬王は仏陀の前世の存在であったとされている。また、No. 5 は No. 6 (rNam) に一致した内容であり、隊長が仏陀の前世の存在であったとされている [cf. 891 c 6-7]。

40) 'smras pa' [D 185 b 6]

(ある人が云った。「隊商長シンガラよりも度胸あり、智慧ある人が居ようか。隊商長シンガラを王として灌頂すべきだ。」「その通りだ。」と [云って]、彼らは隊商長シンガラに云った。「隊商長、王位を受けてください」。彼は云った。「私は商いで生活しているのですから、王位など何になりましょう。」彼らは云った。「隊商長、他の者では王位に着くことはできませんから、受けてください。」彼は云った。「[貴方がたの] 誓いによって、[王位] を受けましょう。若しあなた方が私の言葉通りにしてくださる [と誓う] ならば⁴¹⁾。」彼らは云った。「[誓いを] 致しますから、[王位を] 受けてください。相違ございません。」彼らは街を綺麗にしてから、隊商長シンガラを非常な敬意をもって王位に灌頂した。)

ここでは記述の一致には至らないが、ともに国の人々の推挙によって国王に任命されるという要素が見出せる。つまり、SA と No. 6 (rNam) のみが「商人の出自でありながら王位に即位する」という物語になっていると云える。

ここまでの考察により、本稿で挙げた雲馬王譚を含むテキストの中で、SA と最も関連性が強いと考えられるのは No. 6 (rNam) のテキストであるという可能性が示された。このテキストは SA と極めて近い表現を含んでおり、かつ「雲馬王による帰郷」「王位に即位する」という二要素を共有している。このことは、Divy が説一切有部の律文献と関係の深いものであるという従来の説に抵触するものではない。しかしながら、雲馬王譚そのものと SA とでは、明らかに物語の設定が異なっているという点は否めない。そこで次に、SA が雲馬王譚に対してどのように関係付けられるかという点について考察してみたい。

3 雲馬王譚と SA の関係

雲馬王譚が No. 3 (中阿含經) などの比較的古いテキストにも見出せ、かつ部派を超えた広がりを見せている点から推し量れば、おそらくは雲馬王譚の方が SA よりも先に成立し、伝播していたと考えるのが妥当であろう。このことを前提に、各物語の主旨という観点から、雲馬王譚に対する SA の関係について考察したい。

No. 1 (J 196) – No. 6 (rNam) については、その主旨を最も簡潔に表している記述として、偈頌に注目する⁴²⁾。

この偈頌は、羅刹女の化けた姿である美女や、様々な財宝、彼女等との間に儲けた子供た

41) Vt では訳が若干補われている : tangyariylaju cidabasu abuqu bui-y-a: ker be ta minū ūge-ber üyildbesü bolqu bolai: [252 b 30–31] (誓うことができるなら、[王位を] 受けましょう。若し貴方がたが私の言葉どおりにするというなら、[王に] なんと致しましょう。)

42) なお本稿で取り上げた偈頌に類するものが、Udānavarga 第二十一章 'Tathāgatavarga' に於いて確認される [cf. Bernhard (ed.) 1965: 282]。さらに、Udānavarga の漢訳の一つである『出曜經』(T. 212) にも見られ、その偈頌の解説として、雲馬王譚が語られている [大正藏: IV, 718 c 22–720 a 29]。なおこの漢訳テキストは 399 年、カシミールの説一切有部の僧侶 Samghabhadra と甘肅省出身の翻訳僧・竺佛念によって訳出されたものである [Willemen 1978: XV–XVI]。

ちに心を残してはいけなると雲馬王が諭した⁴³⁾のに、未練のあまり振り返った商人たちは、雲馬王から落ちて羅刹女に食べられ、そうでなかった者は無事に閻浮洲に辿り着いた⁴⁴⁾というくだりに関係するものと思われる。

No. 1 (J 196) :

ye na kāhanti ovādaṃ narā buddhena desitaṃ /
vyasanān te gamissanti rakkhasiḥi va vāṇijā //
ye ca kāhanti ovādaṃ narā buddhena desitaṃ /
sothiṃ pāraṃ gamissanti vālāhena vāṇijā // [130. 6-9]

(ブッダによって示された教えを実行しようとしぬ者たち、彼らは不幸に赴く。羅刹女たちによって [食べられた] 商人たちのように。

ブッダによって示された教えを実行する者たち、彼らは幸いなる向こう岸に赴く。ヴァーラーハによって [海を渡った] 商人らのように。)

No. 2 (ŚJ) :

ye naiva śraddadhiṣyanti vacanaṃ dharmarājino⁴⁵⁾ /
vyasanaṃ te nigamṣyanti rākṣasiḥi va vaṇijā //
ye tu puṇaḥ śraddadhiṣyanti vacanaṃ dharmarājino /
svastinā te gamiṣyanti vālāhena iva vāṇijā // [89. 17-19]

(ダルマの王の言葉を決して信じようとしぬ者らは、災いに向かうであろう。羅刹女たちによって [食べられた] 商人たちのように。

一方、ダルマの王の言葉を信じようとする者らは、無事に [向こう岸に] 行くであろう。ヴァーラーハによって [海を渡った] 商人たちのように。)

No. 3 : (中阿含經)

若不信於 佛說正法律
 彼人必被害 如為羅刹食
 若人有信於 佛說正法律
 彼得安隱度 如乘駝馬王 [645 b 2-5]

(仏の説かれた正しい法や規律を信じない者があればその人は必ずや害を被る。羅刹に食べられた [者たち] のように。

仏の説かれた正しい法や規律を信じる人があれば、その人は必ず安穩に渡る。駝馬王に乗った [者たち] のように。)

43) No. 2 (ŚJ) [76. 2-10], No. 3 (中阿含經) [644 a 25-b 16], No. 4 (gShi) [P 223 a 7-223 b 4], No. 5 (根本説一切有部毘奈耶) [889 a 25-b 9], No. 6 (rNam) [P 169 a 1-b 6]

44) No. 2 (ŚJ) [76. 15-17], No. 3 (中阿含經) [644 b 21-c 7], No. 4 (gShi) [P 223 b 8-224 a 3], No. 5 (根本説一切有部毘奈耶) [889 b 17-22], No. 6 (rNam) [P 170 a 7-b 7]. ただし No. 1 (J 196) には雲馬が商人たちに諭すという記述はなく、五百人の内の半数が女達に未練があるからと自発的に居残り [129. 5-6], 後に食べられてしまった [129. 21-23] となっている。

45) -rājino; パーリ語に見られる svarabhakti に類する現象と思われる [cf. Hinüber 2001: 195, Geiger 1994: 21-27].

No. 4 (gShi) :

sangs rgyas bstan la blun po'i mi/gang dag dad par mi byed pa/
de rnams sdug bsngal 'thob 'gyur te/srin mo'i nang du tshong pa bzhin//
shes rab can gyi mi gang dag/sangs rgyas bstan la dad byed pa/
bde bar pha rol 'gro 'gyur te/sprin gyi shugs kyis tshong pa bzhin/ [P 224 a 7-8]

(仏説を信じない愚かな人々は苦を得ることになる。羅刹女の中にある商人のように。仏説を信じる、智慧もてる人々は、平穩に彼岸に赴くのである。雲の力ある [馬王] によって [海を渡った] 商人のように。)

No. 5 : (根本説一切有部毘奈耶)

諸有無智人 不信於佛教
當受輪迴苦 如愛羅刹女
若有智慧人 遵奉於佛教
當出生死海 如隨天馬言 [889 c 14-17]

(あらゆる愚かな人は仏の教えを信じない [ので]、まさに輪廻の苦しみを受けるのである。羅刹女を愛した [者たちの] ように。

賢明な人が仏の教えを守るなら、まさに生死の海を出る。天馬の言葉に従った [者たちの] ように。)

No. 6 (rNam) :

mi gang byis pa 'dra ba dag/sangs rgyas bstan la ma dad pa/
srin mo rnams kyi⁴⁶⁾ tshong pa dag/sdug bsngal 'gyur ba ji bzhin no//
mi gang shes rab ldan pa dag/sangs rgyas bstan la dad byed pa/
sprin shugs can gyi tshong pa dag/bde legs pha rol 'gro ba bzhin// [P 171 a 5-6]

(愚者の如き人々⁴⁷⁾は、佛の教えを信じない。羅刹女たちの商人達が苦しむようになるように。智慧のある人々は、佛の教えを信じる。雲の力ある [馬王] の商人達が無事に対岸に行くように。)

以上のように、No. 1 (J 196) -No. 6 (rNam) の全てにおいて、極めて類似した内容をもつ偈頌があることが確認された。これらの偈頌に示された内容から見て、雲馬王譚は、妻子や財物に心を残すことなく、仏陀の教えに従うことを奨励する説話と考えられる。

一方、SA には物語の主旨を提示するような偈頌は見られない。そこでまず、その内容が総括されていると思われる、前世譚の冒頭の箇所注目してみたい。

SA :

bhagavān āha — na bhikṣava etarhi, yathā atīte 'py adhvaṇi . . . mayā anekair duṣkaraśatasahasrair devamanuṣyaduṣprāpyām śakrabrahmādyair api duradhigamām badaradvīpayātrām var-

46) デルゲ版では具格が使われている : srin mo rnam kyi [D 183 b 6] (羅刹女たちによって)。一方 Vt は所格で解釈していると思われる : eme mangras-nurud-ta [250 a 11-12] (羅刹女たちのところで)。

47) Vt は、byis pa を「子供」と解釈している : kübegün-dür adali kümün [250 a 10] (子供に等しい人)。

śaśatena sādhayitvā etad eva caurasahasram ārabhya kṛtsno jāmbudvīpaḥ suvarṇarajatavaiḍūrya-sphaṭikādyai ratnaviśeṣair manorathepsitaiś copakaraṇaviśeṣaiḥ saṃtarpayitvā daśabhiḥ kuśalaih karmapathaiḥ pratiṣṭhāpitaḥ. tac chruṇuta — [62. 3-7] (世尊は仰った。「比丘等よ、今だけではないのだ。…私が、何百何千もの困難があり、神や人々の到達しがたい、帝釈や梵天らによってすら得がたきバダラ洲への道行きを百年間で成就したので、まさにこの千人の盗賊をはじめ、全ての閻浮洲の者は、金・銀・琉璃・水晶などの諸々の種類の宝石によって、また願望によって望まれた諸々の種類の品物にて満たされ、十善の行為の道によって確立させられたのである。それをお聞きなさい。)」

まず、SA は財物による充足を肯定する内容であることが窺える。さらに十善道の重視が読み取れるが、この点も雲馬王譚には見られない要素である。

十善道は阿含仏典にも説かれており、古くから仏教の重要な徳目とされている。特に初期の大乗経典において積極的に提唱されており、菩薩の戒として扱われている [cf. 平川 1960, 静谷 1974, 勝又 1975]。

さらに、以下の記述にも注目したい。バダラ洲への道行きがあまりにも困難なため、スプリヤが途方に暮れているくだりである。

tasmimś ca parvate candraprabho nāma yakṣaḥ prativasati. sa cintāparaṃ sārthavāhaṃ viditvā lokahitārtham abhyudyataṃ mahāyānasamprasthitaṃ prasannacittaṃ copetyāśvāsayati — na khalu mahāsārthavāhena viśādaḥ karaṇīya iti. [71. 3-5] (その山にもチャンドラプラバという名の夜叉が住みついていた。彼は、考え込んでいる隊長が世間の利益のために立ちあがり、大乘 [の道] に勤しんでいる清らかな心を持つ [人である] ことを知って、また傍にいて励ました。「もし、大隊隊長には落胆なさいませぬよう。)」

ここでは 'mahāyāna (大乘)' という語によって、主人公スプリヤが大乘の教えに努める人とされていることが明確に読み取れる。この物語自体は、部派仏教の一派である説一切有部に属する可能性が極めて高いが、同時に、大乘的要素も持ち合わせていることがわかる。

III 結 論

以下に、SA と雲馬王譚を比較し、両者の異同点を整理してみたい。なお先の考察によって No. 6 (rNam) のテキストが最も SA に近い位置にあるものと推察されたため、比較は No. 6 (rNam) と SA によって行うものとする。表中の○は記述が存在することを示し、×はそれが存在しないことを示す。

	雲馬王譚 (No. 6 rNam)	SA
a. 主人公	シンガラ隊商長	スプリヤ隊商長
b. 雲馬による帰郷	○	○
c. 王位に即位	○	○
d. 仏陀の前世	シンガラ隊商長	スプリヤ隊商長
e. 物語の主旨	仏の教えを遵奉することを推奨	十善道を推奨
f. 財物等の所有について	否定的	肯定的
g. 「大乘」の記述	×	○

a-d までの四項目に関しては、ほぼ共通している。つまり、仏陀の前世の存在である隊商長が、遠方に旅し、雲馬によって閻浮洲に帰るというものであり、この点において大筋の枠組みが一致していると見做し得る。

一方、e-g の三項目より、両者の主旨が明らかに異質のものであることが窺える。雲馬王譚が、妻子や財物を放棄して仏陀の教えに従うことを勧めるものであるのに対して、SA の方は、むしろ財物の保持を肯定している。また十善道の強調や、‘mahāyāna (大乘)’ の語が見られるなど、多分に大乘仏教的性格を窺わせる。

以上の検討の結果として、以下の仮説を提示することができよう。つまり SA は、広く説話として知られていた雲馬王譚に含まれる、「隊商長という仏陀の前世」「雲馬王による帰郷」といった、いくつかの部分的要素を取り入れ、思想としては大乘仏教的な要素を付加し、再構成された作品ではなかろうか。さらに、No. 6 (rNam) との文体の近似性、また Divy そのものが説一切有部の律文献を主たる基盤として編纂されているという従来の指摘を考慮すれば、この一連の換骨奪胎作業は、説一切有部内で行われたと見てほぼ問題は無いだろう。部派仏教と大乘仏教は、思想的に全く断絶されていたわけではないという指摘 [平川 1989: 17-19] も、この見解の裏づけとなり得るように思われる。

Divy にある説話の中で、説一切有部律に見られる雲馬王譚との関連が指摘されていたのは第三十六話のみであった。しかし、ここで新たに、第八話である SA も、その関連説話として加えることができよう。また、SA の成立年代については、Badaradvīpājātaka の成立以前、すなわち五世紀前半以前の可能性も否定できない。

付 記

本稿では、主として雲馬王譚と SA との関係に焦点を当てて考察してきた。しかしながら、SA がそれ以外の説話とも関連を持つる可能性は、無論考えられる。例えば、本稿 I. 2 で言及した Handurukande (1988) の指摘が挙げられる。それによると、『賢愚経』(T. 202) 第八卷四十「大施杼海 (大施海を杼む)」は、大施という名の商人が、如意宝珠を取ってく

るという説話であり、スプリヤ隊商長の説話と細かな事柄においていくらかの類似がある [Handurukande 1988: 27–28]⁴⁸⁾ という。ただし、『賢愚經』は原本そのものが漢人僧侶の聞き書きに基づくものである⁴⁹⁾ため、SA との厳密な比較は基本的に困難である。しかし、Handurukande 1988 の指摘もあるので、改めて具体的な類似箇所に関して、両者の関連について検討を行ってみたい。

「大施抒海」は、仏陀の侍者として阿難が選ばれた因縁を語るものである。SA との類似点としては、主人公の隊商長が有情のために如意宝珠を求めて旅に出るということと、実際にその宝珠で人々の生活を豊かにし、十善道に導いたということ等が挙げられる。一方、宝珠の力の及ぶ範囲、主人公が立ち寄る城の数や様子などに関しては、詳細な点でむしろ相違点が目につく。さらに全く異なる点として、宝珠を与える者が SA ではキンナラ女⁵⁰⁾であるが、「大施抒海」では龍王であり、主人公の行き先も龍王の城であること等が指摘できる。以下、若干の箇所に関して具体的な記述の比較を示す。使用したテキストは次の三者である。

1) 『賢愚經』(T. 202)「大施抒海品」[大正藏: IV, 404 b 17–409 b 29]

48) ここでは言及されていないが、スプリヤが元来商人であるのに対し、大施の出自は婆羅門である。彼は布施を行うための財を獲得しようと海に入る際、隊商長となる。「我爲薩薄。自辨行具。(私が隊商主(薩薄 sārthavāha)と為って、自ら旅支度を取り仕切るとしよう。)」[大正藏: IV, 406 b 23. cf. 赤沼 & 西尾 1930: 254]

49) … 河西沙門釋曇學威德等。凡有八僧。結志遊方遠尋經典。於于闐大寺遇般遮于瑟之會。般遮于瑟者。漢言五年一切大衆集也。三藏諸學各弘法寶。說經講律依業而教。學等八僧隨緣分聽。於是競習胡音折以漢義。精思通譯各書所聞。還至高昌乃集為一部。既而踰越流沙齋到涼州。于時沙門釋慧朗。河西宗匠。道業淵博總持方等。以為此經所記源在譬喻。譬喻所明兼載善惡。善惡相翻則賢愚之分也。前代傳經已多譬喻。故因事改名。號曰賢愚焉。… (『賢愚經記』(『出三藏記集』(T. 2145) 第九卷) [大正藏: LV, 67 c 9–68 a 1 中, 67 c 12–22] (要約: 黄河より西の地方の沙門である釋曇學、威德といった総勢八人の僧侶が遠くまで經典を求めて旅をしていた。[現在の] コータン地方の大きな寺院で五年毎の大勢の僧侶達の集会である般遮于瑟 (Pañcavārṣika) に出くわした。様々な教えが説かれるのを巡りあうままに聴き、競って現地の言葉を習得して漢語の意味を定め、よく考えて翻訳し、各自が聴いたことを書き留めた。道中それらを纏めたものを、当時、涼州(甘肅省武威)で学識高く、主だった沙門であった釈慧朗が、このテキストの源は善悪の事柄について集めた譬喻 (avadāna) であるとした。[しかし] そういった名前のテキストは沢山あるので、改めて名づけて『賢愚』とした。)

ただし、『出三藏記集』の第二巻には、「於于闐國得此經胡本。於高昌郡譯出 ([現在の] コータン地方で、この經の中央アジア [の何等かの] 言語で書かれたテキストを得て、[現在の] トルファンで訳した)」(12 c 17–18.) との記録もある [cf. 高橋 1963, Mair 1999]。

50) *tuṣṭās ca tāḥ kinnarakanyāḥ kathayanti — āścaryaṃ yatredāniṃ daharaś ca bhavān dharmakāmaś ca. na ca kāmeṣu sajjase vā badhyase vā. prabhūtaiś ca ratnaiś ca pravārayanti. dharmadeśanāvṛjītāś ca ekaṃ saubhāsiniṃ ratnam anuprayacchanti.* [72. 22–24] (満足したそのキンナラ女たちは云った。「驚きですわ、貴方さま、これほどお若いのに法を求めておられるとは。[あなたは] 諸々の欲望に執着せず、縛られてもいない。[彼女らは、彼を] 沢山の品物と宝石で満足させた。そして法の教えに傾倒した [彼女ら] は、一つよく輝く宝石を与えた。)

2) 'dzangs blun zhes bya ba'i mdo⁵¹⁾ 中の sbyin ba chen po'i rgya mtshor zhugs pa'i le'u ste sum bcu pa 'o (大施の海に入ることの第三十章)⁵²⁾ テキストの引用は北京版 [P 1008, Hu 227 a 8-238 b 4] に基づくものとし、デルゲ版テキスト [D 341, A 223 a 3-234 a 4] は、綴りの差異等が確認された際、脚注に挙げる。

3) SA [Vaidya 1959: 58-76]

2) は 1) の翻訳であるが、両者の関係は必ずしも明確でないとの指摘もある [Mair 1999: 411-412] ため、ここでは双方共、参考テキストとして取り扱った⁵³⁾。なおテキスト引用末の [] 内は校訂テキストの頁あるいはフォリオ番号、及び行数を示している。

・主人公の訪問先

前述のとおり、主人公に宝珠を与えるのが、SA ではキンナラ女、大施では龍王という点が異なっている。その他にもいくつかの相違点が挙げられるが、まずは主人公の行き先となっている龍王の城について示すことにする。なお、丸内の番号は主人公が巡った順を示している。

- 1) : ① 見一銀城。白淨皦然。知是龍城。[407 b 8]
 ([大施は] 白く清らかで鮮やかな、一つの銀の城を見た。これは龍の城だと分かって...)
 ② 遙見一城。純青琉璃。[407 c 9] (遠くに一つの真っ青な瑠璃色の城を見た。)
 ③ 見一金城。其色晃晃。甚為妙好。[408 a 4-5]
 (一つの金の城を見た。その色は煌々としており、とても見目良いものであった。)
- 2) : ① ring po ma lon par dngul gyi mkhar zhig mthong nas klu'i gnas yin no snyam bsams te...⁵⁴⁾ [P 233 b 2]
 (程なく、銀色の城が見えたので、龍の住まいだと思って...)
 ② rgyang ma nas bai dū rya sngon po'i mkhar cig mthong ngo [P 234 b 1]
 (遠くに、蒼い琉璃の城を見た。)
 ③ rgyang ma nas gser gyi mkhar rab tu 'tsher ba zhig mthong nas... [P 235 a 5]
 (遠くに、たいそう眩い金の城を見たので...)

51) Chos grub (9世紀) 訳といわれる [高橋 1963: 50-54, Mair 1999: 410]。

52) モンゴル語訳テキストでは第31章となっている [Chandra 1979: XC, Ge 316 b 30-334 a 11]。物語の末尾 [334 a 10-11] に題名と番号が示されている: yeke öglige-tü dalai-dur oruysan ručün nigedüger jüil bolai (大施が海に入った [という] 第三十一の事柄である)。

53) なお、2) のモンゴル語訳には、二種のタイトル名が伝えられている。一つは Handurukande 1988 などでも言及されている Üliger-ün dalai (説話の海) であり、もう一つはモンゴルの大蔵経における名称である Silügün onul kemegdekü sudur (正論と云われる経) である [cf. Chandra, 1979: XC, Čoiraljap 1998, Uspensky (comp.) Nakami (ed.) 2001: 29-30]。

54) この箇所は、デルゲ版と若干の記述の差異が見られた。ring por ma lon par dngul gyi mkhar zhig mthong nas klu'i gnas zhig yin snyam ste... [D 229 a 3-4]

上記の通り、主人公の巡った城は、銀の城、琉璃の城、金の城の三箇所のみである。これに対し、SA では四箇所を巡っている。

- 3) : ① *sauvr̥ṇaṃ kinnaranagaram anuprāptaḥ* [72. 9-10] (金のキンナラの街に辿り着いた。)
- ② *adrākṣit supriyo mahāsārthavāho rūpyamayam kinnaranagaram* [72. 32-73. 1] (スプリヤ大隊商長は、銀で出来たキンナラの街を見た。)
- ③ *vaiḍūryamayam kinnaranagaram anuprāptaḥ* [73. 6-7] (琉璃で出来たキンナラの街に辿り着いた)
- ④ *adrākṣit supriyo mahāsārthavāhaś caturtham catūratnamayam kinnaranagaram* [73. 13] (スプリヤ大隊商長は、四種の宝石で出来た四番目のキンナラの街を見た。)

銀、琉璃、金という城の色は「大施拵海」と重複している要素として認められるとしても、その順番、および巡った場所の数は異なっている。

・宝珠の力

スプリヤ、大施の双方とも、訪問した先々で法話を説いた報酬として、望みのものを齎すという如意宝珠を与えられる。ただし大施には当初から如意宝珠が報酬として約束されているのに対し、スプリヤにはそういった約束は何らなされていない。加えて、宝珠が効力を及ぼす範囲にも差異が認められる。主人公の問いに対して龍王、或はキンナラ女が、望みのものを齎すことの出来る範囲を答える⁵⁵⁾のであるが、ここでは紙面の都合上、その範囲の記述

55) そのくだりの一例として、最初の訪問先での問答をここに示しておく。

1) : 而問之言。今汝此珠。有何力能。即答之言。此珠能兩二千由旬一切所須。[407c5-6] (そして [大施は] こう云って尋ねた。「さてあなた、この珠にはどんな力があるのでしょうか。[龍王は] すぐさま答えた。「この珠は二千由旬に渡って、あらゆる望みの品を雨降らせることができるのです。」)

2) : *de nas klu'i rgyal po la nor bu rin po che 'di mthu stobs ci yod ces dris na//smras pa/nor bu 'di ni dpag tshad nyis stong kho ra khor yug tu dgos pa thams cad char bzhin du 'bebs nus so* [P 234 a 7-8] (それから [大施が] 龍王に「この宝石にはどのような力があるのでしょうか」と尋ねると、云った。「この宝石は二千由旬に渡って絶えず、あらゆる必要なものを雨の如く降らせることが出来るのです。」)

3) : *tataḥ supriyo mahāsārthavāhas tasya ratnasya prabhāvānveṣi kathayati — asya ratnasya bhagīnyāḥ ko 'nubhāva iti. tāḥ kathayanti — yat khalu sāthavāha jānīyāḥ — tad eva poṣadhe pañcadaśyām śīraḥsnāta uṣoṣadhoṣita idaṃ mañiratnaṃ dhvajāgre āropya yojanasahasraṃ sāmantakena yo yenārthi bhavati hiraṇyena vā suvarṇena vā annena vā vastreṇa vā... dhānyena vā, sa cittam utpādayatu, vācam ca niścārayatu. sa hacittotpādād vāgniścāraṇena yathepsitāścopakaraṇaviśeṣā ākāśād avatariṣyanti. ayam asya ratnasyānubhāvāḥ.* [72. 24-30] (宝石の力を求めている [スプリヤ隊商長] は云った。「妹達よ、この宝石には、どのような威力があるのでしょうか。」彼女らは云った。「お聞き下さい、商隊長どの。あなたがご存知のとおりです。それこそ、断食の日である十五日に灌頂し、断食して過ごした者が、この宝珠を幢の先に載せて周囲一千

のみを抜粋する。なお白丸内の番号は夫々、上に示した主人公の訪問先に対応している。

- 1) : ① 二千由旬 [407 c 6] ② 四千由旬 [408 a 1-2] ③ 八千由旬⁵⁶⁾ [408 b 6]
 2) : ① dpag tshad nyis stong [P 234 a 8] (二千由旬) ② dpag tshad bzhi stong [P 235 a 3] (四千由旬) ③ dpag tshad brgyad stong⁵⁷⁾ [P 236 a 2] (八千由旬)
 3) : ① *yojanasahasraṃ* [72. 27] (一千由旬) ② *dvisāhasrayojana-* [73. 4] (二千由旬)
 ③ *trisāhasrayojanikaṃ* [73. 9] (三千由旬の [宝石]) ④ *kṛtsne jambudvīpe* [74. 3] (閻浮提全土において)

以上のように、「大施拵海」では「二千」「四千」「八千(閻浮洲全土)」という倍数が記されているのに対し、SA では「一千」「二千」「三千」「閻浮洲全土」となっている。最終的にはいずれも閻浮洲全土に財を齎すものとなっはいるが、この数字の記述を見る限り、前述した訪問先についてのそれと同様、両者間に明確な関連性は見出されないように思われる。

・帰路

主人公が閻浮洲に帰るくだりにおいてもまた、差異が見られる。大施が宝珠の力を使って帰るのに対し、SA では本論で取り上げたとおり、雲馬王の力を借りて帰郷する。

- 1) : 若今實是旃陀摩尼。當令我身能飛虛空。求願已訖。即舉其身。便能飛翔。出于海外。已度海難。[408 b 11-13] (「もし今、本当にこれが如意宝珠なら、わが身を虚空に飛ばせ。」と願いを求め終わるや、[宝珠は] すぐさまその身体を持ち上げた。そうしてよく飛んで海の外に出て、海の難所を渡し終えた。)
 菩薩得珠。復更飛去。到便先問入海同伴買客。即下在地。[408 c 16-17] (菩薩は珠を得て、また更に飛んでいった。[閻浮洲に] 到着するとすぐに、先ず一緒に海に入った商人を訪ね、即座に [空から] 下りて地面に立った。)
- 2) : nor bu 'di yid bzhin gyi nor bu rin po che yin yang dag na/bdag nam mkha' la 'phur bar gyur cig ces smras so//de skad ces smras ma thag tu nam mkha' la 'phur te rgya mtsho'i bgegs las thar nas/rgya mthso'i ngogs su phyin par gyur te... [P 236 a 5-6] (「この宝珠が如意宝珠だと言うのが本当ならば、私を空に飛ばせ」と云った。その言葉を云うや、空を飛び、海の妨げから抜け出ると、海の岸に辿り着いて...)
 de nas byang chub sems dpas rin po che phyir thob nas steng gi nam mkha' la 'phur

由旬の範囲で、金あるいは黄金、あるいは食物、あるいは着物...あるいは穀物を望みとしている人は、[それを] 思念し、そして言葉にお出しなさい。念じて言葉に出すことで、望みのままの品物が空から降ってくるでしょう。)

- 56) このテキストではこれを閻浮洲全土を覆う広さとしている：閻浮提地。七千由旬。此珠之徳。副我所望。[408 b 7-8] (閻浮洲の地は七千由旬だ。この珠の恩恵は、私の望むところに副うものだ。)
- 57) 同上。'dzam bu gling gi khyon ni dpag tshad bdun stong las med de/nor bu rin po che 'di ni bdag gi re ba skong ngo [P 236 a 3] (閻浮洲の広さは七千由旬以上ないから、この宝珠は私の望みを満たしてくれる。) なお、デルゲ版では、'nor bu rin po che 'dis ni' [D 231 b 3]。)

te gnas su 'ong nas/sngar tshong pa grogs po rnams yod dam bde bar phyin tam zhes dris so/ [P 237 a 4] (それから菩薩は宝珠を再び得ると、上空を飛んで故郷に行った。そして、「昔の商人の仲間達はありますか、達者にやっていますか」と尋ねた。)

- 3) : *svastikṣemābhyāṃ vārāṇasīm anuprāpaya. evam ukte bālāho 'svarājah supriyaṃ mahāsārthavāham idam avocat — na te mahāsārthavāha mama pṛṣṭhādhirūḍhena diśo nāvalokayitavyāḥ, nīmilitākṣeṇa te stheyam. ity uktvā bālāho 'svarājah pṛṣṭham upanāmayati. atha supriyo mahāsārthavāho bālāhasyāśvarājasya pṛṣṭham adhiruhyā yathāmuṣiṣṭo 'lpaiś ca kṣaṇalavamuhūrtair vārāṇasīm anuprāptaḥ.* [75. 3–6] (〔無事平穩に危険なく、ヴァーラーナシーに着かせてください。〕このように云われて雲馬王はスプリアヤ大隊商長にこう云った「いけないよ、大隊商長、お前は⁵⁸⁾私の背中に登ってあちこち見てはいけない。お前は目を閉じてじっとしていなさい。」と云って、雲馬王は背中を差し出した。そこでスプリアヤ大隊商長は雲馬王の背に登って教えられた通りにした。[そうして彼は、] わずかな時間でヴァーラーナシーに着いた。)

以上、三つの項目について比較してみた。確かに双方ともに仏陀の前世譚であり、宝珠を求めて遠方まで旅する隊商長を主人公とする点や、その宝珠によって人々に富を齎す点、またその目的が十善道の推奨である点⁵⁹⁾など、類似する要素をもつ説話であることは否めない。しかしながら、これらの点はあくまで類似であって、テキストとしての直接的な関係を示唆

58) te = tvayā. [cf. BHSg, 20. 20]

59) 1) : 龍來問言。汝求此寶。用作何等。菩薩答言。欲用給濟一切衆生。龍復問言。如汝言者。我曹海中衆生甚多。何以不與。必欲得去。菩薩答言。海中之類亦是衆生。然無劇苦。如閻浮提人民之類。為錢財故。殺害欺誑。作十不善。死墮三途。我以人類。解於法化。故來索寶。先充所乏。後以十善。而勸誨之。龍聞其語。出珠還之。[408 c 6–14] (龍がやって来て尋ねて云った。「お前はこの宝石を求めて何をするのに使うんだ。」菩薩は答えて云った。「すべての生き物を救うのに使いたいのです。」龍は再び尋ねて云った。「お前の言うとおりなら、俺たち海の中の生き物はとても沢山いるのだ。なんで [宝珠をこちらに] 与えずに何が何でも手に入れて行こうとするのだ。」菩薩は答えて云った。「海の中の類もまた、生き物ではございますが、しかしながら、閻浮洲の人々の類のような、非常に苦しみはございません。[閻浮洲の人々は] お金や財産のために殺したり欺いたり [といった] 十不善を為して、死んだら三悪趣に墮ちるのです。私は人々を法によって教え導く中で [苦しみから] 解放つために、やって来て宝石をさがし求めるのです。まずは不足を満たしてから、後に十善を用いてこれを勧め諭すのです。」龍はその言葉を聞くと、珠を取り出して、これを返した。)

2) : ... klu rnams kyis byang chub sems dpa' la khyod kyī nor bu rin po che 'di ci zhiḡ tu dgos/smras pa bdag gyis sems can la phan pa'i don du dgos so//klu smras pa/sems can la phan pa'i don du dgos na/rgya mtsho'i nang na yang sems can mang du yod na ci'i phyir bskur zhes smras so//smras pa/rgya mtsho'i nang na gnas pa yang sems can yin mod kyī/de la phongs pa'i sdug bsnḡal med de/'dzam bu gling gi sems can ni nor gyī phyir gcig la gcig rnam par 'tshē zhiḡ gnod pa byed de/mi dge ba bcu rdzogs par byed pas tshe 'phos nas kun sems can dmyal bar skye ste/bdag ni de dag la snying brtse ba'i phyir rin po che dgos so/zhes smras pa dang/klu rnams kyis nor bu rin po che phyung ste/slar phul lo/ [P 236 b 8–237 a 3] (... 龍たちが菩薩 (大施) に、「お前はこの宝珠を何のために必要とし

し得るか否かは疑問である。

また、冒頭でも述べたが『賢愚經』が聞き書きに基づくテキストである以上、たとえ類似点があっても、テキストとしての関連性を検証することは困難である。あるいは両者共通の何等かの源泉が求められるかもしれないが、現時点ではこれも推測の域を出ない。

参 考 文 献

- 赤沼智善・西尾京雄 (1930) 『国訳一切經 本縁部』 7 大東出版社。
- 荒牧典敏・小南一郎 (訳) (1993) 『大乘仏典〈中国・日本篇〉』 3 中央公論社。
- Bernhard, Franz (1965) *Udānavarga* 1, Göttingen.
- Chalmers, Robert (ed.) (1960) *Majjhimanikāya* 3, London.
- Chandra, Lokesh (ed.) (1978) *Mongolina Kanjur* 66, Delhi.
- Chandra, Lokesh (ed.) (1979) *Mongolian Kanjur* 90, 95, 101, Delhi.
- Čoiraljab (1988) Mongγul burqan-u sudur-daki üliġer tuγuji-yin jokiyal. In: Bulaγ (ed.) *Mongγul burqan-u šasin-u uran jokiyal-un sudulul* (蒙古佛教文学研究), 海拉尔, 180-208.
- Cowell, E. B. and Neil, R. A. (1886) *The Divyāvādāna — A Collection of Early Buddhist Legends* 一, Cambridge.
- 道世 (撰集) (1989) 『法苑珠林』 上海。
- Das, Sarat Candra (1888) *Avadānakalpalatā of Kṣemendra*, Calcutta.
- 榎本文雄 (1984) 阿含經典の成立『東洋学術研究』 23 (1), 93-108.
- 榎本文雄 (1988) 初期仏教思想の生成——北伝阿含の成立——『インド仏教』 1 岩波書店, 99-116.
- 榎本文雄 (1998) 「根本説一切有部」と「説一切有部」『印度學佛教學研究』 47 (1), 111-9.
- Fausbøll, V. (ed.) (1990. first ed. 1877) *The Jātaka* 1, Oxford.
- Fausbøll, V. (ed.) (1990. first ed. 1879) *The Jātaka* 2, Oxford.
- Fausbøll, V. (ed.) (1922. first ed. 1897) *The Jātaka* 7, Oxford.
- Geiger, Wilhelm (1916) *Pāli Literatur und Sprache*, Strassburg.
- Geiger, Wilhelm (1994. German edition published 1916, English translation first published 1943) *A Pali Grammar*, Oxford.
- Hahn, Michael (1977. second ed. 1992) *Haribhaṭṭa and Gopadatta*, Tokyo.

↙ ているのか。」[と尋ねたので、菩薩は]云った。「私は有情への利益のために必要としているのです。」龍は云った。「有情への利益のために要るのなら、海の中にも沢山の有情がいるというのに、何で[閻浮洲に宝珠を]遣るのだ。」と云った。[菩薩は]云った。「海中の中に住まうのも確かに有情ではございますが、そこに困窮の苦しみはございません。ですが、閻浮洲の有情は財のためにお互いに殺し、傷つけるのです。そして、十不善をすべて行って、死んで後はみな、地獄に生まれてしまうのです。そこで私は彼等のことをいとおしく思うが故に宝石が必要なのです。」と云ったら、龍たちは宝珠を取り出して、再び与えた。

- Hahn, Michael (1981) Das Datum des Haribhaṭṭa. *Alt- und neu-indische Studien* 23, Hambrug, 107 – 120.
- Handurukande, Ratna (1988) *The Suriyasārhavāhajātaka — Edited with an introduction*, Bonn.
- 干瀆龍祥 (1954) 『本生經類の思想史的研究』 東洋文庫.
- Hinnüber, Oskar (2001) *Das älter mittelindisch im Überbilck*, Wien.
- 平川 彰 (1960) 大乘戒と十善道『印度學佛教學研究』 8 (2), 688 – 695.
- 平川 彰 (1989) 『初期大乘仏教の研究』, 春秋社.
- 平岡 聡 (2002) 『説話の考古学 —— インド仏教説話に秘められた思想 ——』 大蔵出版.
- Huber, Ed. (1906) Études de littérature bouddhique. *Bulletin de l' École française d' Extrême-Orient* 6, 1 – 43.
- Ishihama, Yumiko & Fukuda, Yuichi (ed.) (1989) *A New Critical Edition of the Mahāvvyutpatti: Sanskrit-Tibetan-Mongolian dictionary of Buddhist terminology* (新訂翻訳名義大集), Tokyo.
- 岩本 裕 (1978) 『佛教説話研究序説』 開明書院.
- 岩本 裕 (1978) 『佛教説話研究』 3 開明書院.
- 勝又俊教 (1975) 大乘仏教の倫理 —— 大乘戒を中心として —— 三枝充恵編『講座仏教思想』 3 理想社 65 – 99.
- 今野 達 (校注) (1999) 『今昔物語集』 1 岩波書店.
- Lefmann, S. (ed.) (1977. 1st ed., 1902) *Lalita Vistara*, Tokyo.
- Lévi, Sylvain (1907) Les éléments de formation du Divyāvadāna. *T'oung Pao*, 2 (8), 105 – 122.
- Mair, Victour (1999) The Khotanese Antecedents of *The Sūtra of the Wise and the Foolish (Xianyu jing)*. In: Zürcher, Erik & Sandar, Lore and others, *Collection of Essays 1993: Buddhism across Boundaries: Chinese Buddhism and the Western regions*, Taipei, 361 – 420.
- 松村 恒 (1994) 蔵語訳律蔵における水平化の問題『日本西藏学会々報』 40, 11 – 17.
- Mette, Adelheid (1997) *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha*, Swisttal-Odendorf.
- 三木紀人他 (校注) (1990) 『宇治集遺物語 古本説話集』 岩波書店.
- Minaeff (1886) Gandha-Vaṃsa. In: *Pali Text Society*, London, 54 – 80.
- 水谷真成 (1999) 『大唐西域記』 3 東洋文庫.
- 森 祖道 (1984) 『パーリ仏教注釈文献の研究』 山喜房佛書林.
- 西本龍山 (1933) 『國譯一切經 律部』 19, 21, 23 大東出版社.
- 外園幸一 (1994) 『ラリタヴィスタラの研究』 上 大東出版社.
- Panlung, Jampa Losang (1981) *Die Erzählstroffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya*, Tokyo.
- Rhys Davids, T. W. (1903. Indian Reprint: 1997) *Buddhist India*, Delhi.
- Rhys Davids, T. W., Carpenter, Estlin. J. (ed.) (1966) *The Digha Nikāya* 2, London.
- 榊亮三郎・西尾京由編 (1923. 復刻版 1998) 『翻訳名義大集 梵・蔵索引』 臨川書店.

- 佐々木教悟 (1971) 根本説一切有部と三啓無常經について『印度學佛教學研究』19 (2), 570-577.
- Senart, É. (ed.) (1882) *Le Mahāvastu*, 1, Paris.
- Senart, É. (ed.) (1977. 1st ed. 1897) *Le Mahāvastu*, 3, Tokyo.
- 静谷正雄 (1974) 『初期大乘仏教の成立過程』百華苑.
- 庄垣内正弘 (1990) モンゴル語仏典中のウイグル語仏教用語について『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂, 157-174.
- Speyer, J. S. (1979. 1 ed., 1909) *Avadānaśataka* 2, Osnabrück.
- 立花俊道 (1930) 『國譯一切經 阿含部』5 大東出版社.
- 高橋盛高 (1963) 賢愚經とザン・ルン『東方學』(26), 47-55.
- 徳永宗雄 (2002) 「平安の巻」と水供養 (*udakakriyā*) —— 『マハーバーラタ』第12巻の形成過程を探る —— 『東方學』(104), 169-155.
- Uspensky, V. L. (comp.), Tatsuo Nakami (ed.) (2001) *Catalogue of the Mongolian Manuscripts and Xylographs in the St. Petersburg State University Library*, Tokyo.
- Vaidya, P. L. (1959) *Divyāvadāna*, Darbhanga.
- Vaidya, P. L. (1959) *Avadānakalpalatā of Kṣemendra* 1, Darbhanga.
- Vaidya, P. L. (1961) *Mahāyāna-sūtra-saṃgraha* 1, Darbhanga.
- Vaidya, P. L. (1987) *Lalita-Vistara*, Darbhanga.
- Willemen, Charles (1978) *The Chinese Udānavarga*, Bruxelles.
- Winternitz, Maurice (1933) *A History of Indian Literature* 2, Calcutta.
- 『大正大藏經』2-4 大正新脩大藏經刊行會, 1924.
- 『大正大藏經』11-12 大正新脩大藏經刊行會, 1925.
- 『大正大藏經』20 大正新脩大藏經刊行會, 1928.
- 『大正大藏經』24 大正新脩大藏經刊行會, 1926.
- 『大正大藏經』55 大正新脩大藏經刊行會, 1928.
- 『北京版 西藏大藏經 (甘殊爾)』23, 27 西藏大藏經研究会, 1956.
- 『北京版 西藏大藏經 (甘殊爾)』30 西藏大藏經研究会, 1955.
- 『北京版 西藏大藏經 (甘殊爾)』40 西藏大藏經研究会, 1958.
- 『北京版 西藏大藏經 (甘殊爾)』41, 43 西藏大藏經研究会, 1957.
- Tibetan Buddhist Canon (The Nyingma Edition of the sDe dge bKa' 'gyur and bsTan 'gyur)* 1, 3, 16, 17, 19, 27 USA, 1980.